

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第30集

# 明戸東遺跡（第2次）

---

1991.3

深谷市教育委員会

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第30集

あけ と ひがし い せき  
**明 戸 東 遺 跡 (第2次)**

---

1991.3

深谷市教育委員会

## 序

緑溢れる自然の恵み豊かな深谷市は、埼玉県内市町村随一の農業生産高を誇っております。深谷ねぎに代表される野菜栽培をはじめ、近年は花や植木の出荷量も目立って増加しており、深谷市の農業も都市近郊型としてその様相を変化させつつ発展を続けております。

深谷市の中でも、特にその北半部は、利根川がもたらした肥沃な大地に見渡すかぎり田園の広がる、実り豊かな穀倉地帯となっております。この地域にも現代化の波は押し寄せており、国道17号深谷バイパスや県道深谷弁財線の開通など、地域の状況は急激に変化しております。こうした中、昭和62年度から平成元年度にかけて実施された明戸南部ほ場整備事業は、農家の皆様の農業に対する熱意が成さしめた大事業であり、皆様の御努力の甚大なることを思うにつけ、深谷市の農業の益々の発展を確信する次第であります。

上記のような大事業は、文化財の保護の点でも大きな影響がありました。開発事業に伴い、いわば明戸南部地区一帯で大規模な遺跡発掘調査が実施され、多大な成果が挙がっております。縄文時代の昔から人々がこの地を生活の舞台とし、多種多様な歴史が大地の中に刻まれていることが明らかになってまいりました。この度も明戸地区におきまして、市道8号線の改良工事に伴い発掘調査を実施しましたところ、平安時代の住居跡などが発見されました。本書はその成果をまとめたものです。郷土史研究の一助ともなれば、望外の幸せに存じます。

最後に、関係者の皆様に感謝を申し上げ、明戸地区のいっそうの発展を祈念いたしまして、序といたします。

平成3年3月

深谷市教育委員会

教育長 鳥 塚 恵和男

## 例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字明戸292 番地先における、市道 8 号線道路改良工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。事業名は明戸東第 2 次発掘調査とした。
2. 発掘調査は深谷市教育委員会が主体となって実施した。
3. 現地の発掘は、平成元年 6 月 20 日～7 月 5 日に実施した。
4. 本書の執筆・編集及び撮影は澤出晃越が行った。
5. 挿図中の方位は、座標軸に基づいている。
6. 出土品・図面及び写真は深谷市教育委員会が保管している。

## 発掘調査の組織

調査主体者 深谷市教育委員会 教育長 鳥塚恵和男

教育次長 飯島光武（平成元年度）

永井新八（平成 2 年度）

事務局 深谷市教育委員会社会教育課 課 長 飯島光武（平成元年度、兼務）

永井新八（平成 2 年度、兼務）

課長補佐 須長欣二

文化財保護係長 田中島功

庶務係長 金子信子

主 任 関根広子

主 事 古池晋禄

調査担当者 深谷市教育委員会社会教育課 主 任 澤出晃越

調査参加者 相沢恵 宇賀地桂子 大原黎子 加瀬律子 加藤佳子 佐々木由紀子 里山まり子

島津芳子 鈴木令子 関根仁子 滝口知子 玉瀬静枝 西井れい子 土師澄子

湯沢直子

河合詔子 久米紀子 小沼和子 砂田伊久子 都築百合子 細川ケイ 水野祥代

本橋玲子 森光代 渡辺哲子

## 目 次

序	
例言	
目次	
I. 発掘調査に至る経過	1
II. 遺跡の地理的歴史的環境	3
III. 調査の概要	5
IV. 遺構と出土遺物	5
写真図版	

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図 (1/40,000)
第2図	調査区周辺地形図 (1/5,000)
第3図	調査区全測図 (1/300)
第4図	第1号住居跡・第1号竪穴遺構実測図 (1/60)
第5図	第11号溝跡遺物出土状態 (1/30)
第6図	出土遺物 (1/3)

## I. 発掘調査に至る経過

深谷市は東京都心から約74km、埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県に接している。近代日本経済の礎を築いた偉人、渋沢栄一の生誕地として、また、深谷ネギの産地として知られ、古くは康正2年（1456）に山内上杉氏の一族である深谷上杉房憲が現在の市の中心部北側に深谷城を築いたといわれ、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約94,000人、面積約69.4km<sup>2</sup>で、農業粗生産高は県内市町村随一を誇り、商工業等の発展も著しく、急速に都市化が進行しており、市当局は市民生活と都市機能の調和のとれたまちづくりを推進している。

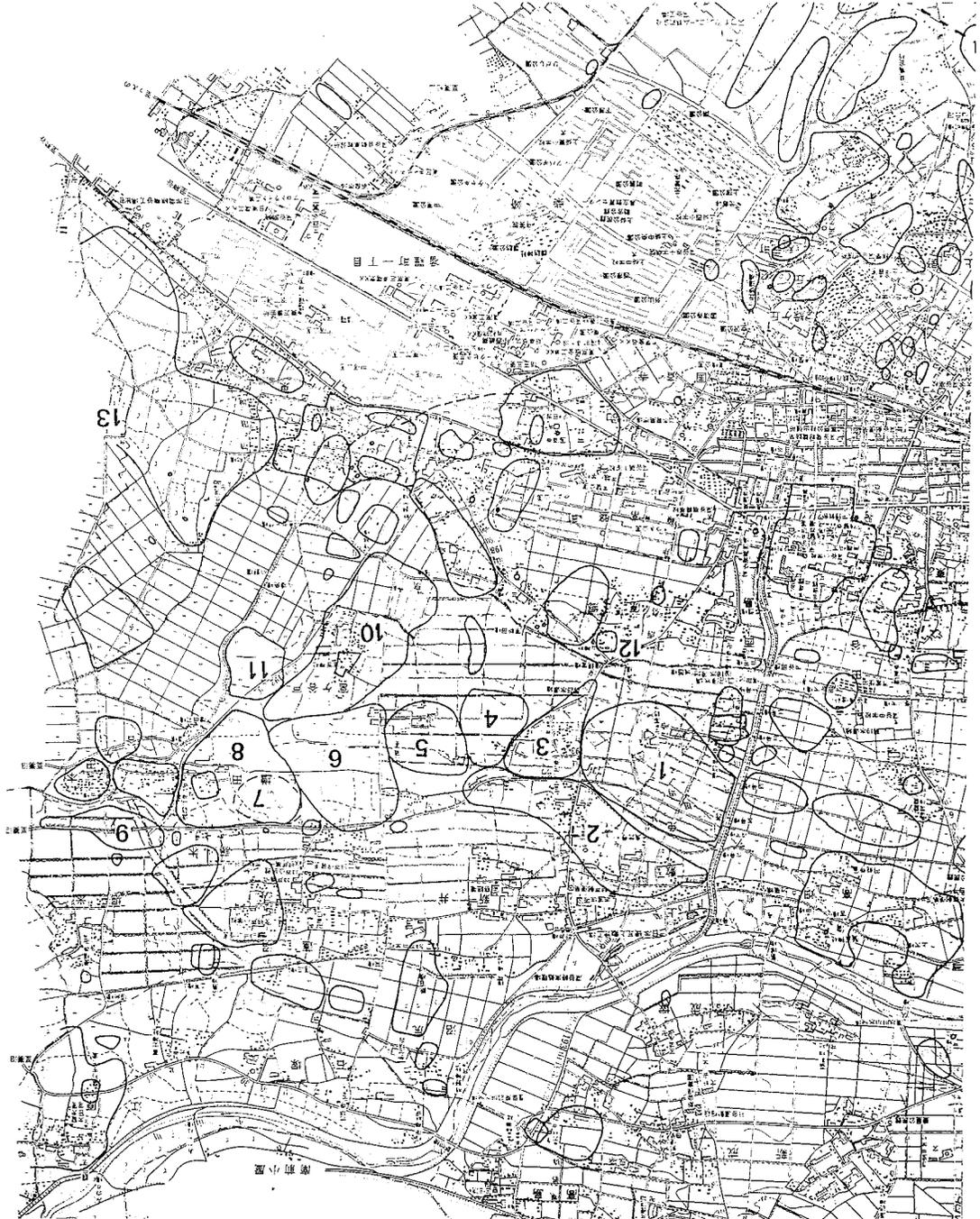
こうした状況にあって、交通網、特に道路の改良整備は急務となっている。市内明戸地区を南北に通る市道8号線も改良拡幅工事の対象となった。昭和63年度の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査により、この工事予定地の近辺で平安時代の住居跡などの遺構が発見されていた。このため工事を担当する市都市整備部建築課と文化財保護担当の市教育委員会社会教育課は協議を行い、実態を把握するためにまず確認調査を実施することとした。

確認調査は平成元年4月28日に行われ、予想どおり平安時代の住居跡などが検出され、工事予定地のうち、約750m<sup>2</sup>について発掘調査が必要なものと判断された。そこでこの結果をもとに社会教育課と建設課は協議を煮詰め、経費は建設課会計において負担し、6月～7月の約3週間をもって現地発掘調査を実施することとした。既存道路の改良工事であるため、特に準備には慎重を期し、両課協力のもとに周辺住民への周知、道路専用手続き及び迂回路の設定、通学路の変更などを行った。6月半ばには準備もほぼ整い、6月20日より現地の発掘を開始した。

ちなみに、当事業に関し、平成元年6月19日付け教文第3-73号文書により、埼玉県教育委員会教育長からの周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての指導通知があった。

第1図 遺跡位置図 (1/40,000)

1. 上敷免遺跡
2. 上敷免北遺跡
3. 本郷前東遺跡
4. 新屋敷東遺跡
5. 新田裏遺跡
6. 明戸東遺跡
7. 上増田古墳群
8. 原遺跡
9. 城北遺跡
10. 宮ヶ谷遺跡
11. 東川端遺跡
12. 榎山神社
13. 西別府廃寺跡



## II. 遺跡の地理的歴史的環境

明戸東遺跡は、JR高崎線深谷駅の北東約3.5 kmにある。周辺一帯は本庄市・岡部町から深谷市を経て熊谷市・妻沼町へ続く平坦広大な妻沼低地であり、明戸東遺跡辺りでの標高は31～32mである。妻沼低地内は現在は地場産業である瓦や土管、煉瓦等の原土採取や土地改良などによりかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、昭和57年度に実施された深谷市教育委員会による深谷市遺跡詳細分布調査により、利根川に平行するように東西に、主に古墳時代後期以降の遺跡が血洗島・矢島・大塚島・内ヶ島などの島のつく地名の土地を包括して帯状に連続している（明戸東遺跡も含まれる）ことが確認された。ここを横断する国道17号線深谷バイパスの建設に伴う財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査により、この遺跡帯の内容は一層綿密に明らかになりつつある。こうした状況は、現在では必ずしも明確ではない自然堤防の発達状況を遺跡が逆によく示したものと見えよう。

さて、上記のように妻沼低地内の旧自然堤防上には数多くの遺跡が確認されているが、特に古墳時代以降の集落跡が集中的に確認され、道路工事などに先行して発掘調査が実施されている。中では、県道工事に伴って埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した本郷前東遺跡・東川端遺跡発掘調査、歩行者自転車専用道路工事に伴って深谷市教育委員会が実施した上敷免遺跡発掘調査の成果などが既に公表されているが、明戸東遺跡についても、国道17号線深谷バイパス建設工事に伴って埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した発掘調査の成果が報告されている。それによれば、遺跡の南西部では主に平安時代の集落跡が確認され、南部では弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が、南東部では縄文時代後期の遺物包含層が確認されている。これは、現在明戸東遺跡（深谷市No.60-185遺跡）として把握されている範囲が実は複数の遺跡から成り、非常に多様な状況にあることを示している。

今回の発掘調査区は遺跡の北西部に当たるが、南西部と同様に平安時代の住居跡が検出された。なお、昭和63年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査でも、隣接場所で平安時代の住居跡2軒が確認されている。この地域では他の時代の住居跡などはほとんど検出されず、各時代の集落の占地状況などを考察するうえで興味深いところである。

周辺で平安時代の遺構等が確認された遺跡としては、上敷免遺跡、上敷免北遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、東川端遺跡などがある。さらに、今回の発掘調査対象地の南西約1.5kmにある楡山神社と、南東約2.7kmにある西別府廃寺跡及び西別府祭祀遺跡（湯殿神社裏遺跡）が特に注目されよう。楡山神社は延喜式内社とされる古社で、明戸東遺跡がある幡羅郡の総鎮守である。西別府廃寺跡は8～9世紀の遺跡で、最近の熊谷市教育委員会の発掘調査などにより、郡寺にも比定しうるほどの規模と内容をもつことが明らかになりつつある。西別府祭祀遺跡は7世紀末～9世紀頃の遺跡である。いずれも当地域の古代の状況を考察する上で欠くことのできないものである。



第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

### Ⅲ. 調査の概要

平成元年6月20日、パワーショベルによる表土の除去により発掘調査を開始した。既に暗渠が埋め込まれている部分は掘削しなかったため、暗渠を挟んで北側をA区、南側をB区として調査を行った。調査区内には、業者に委託して座標軸上の6mピッチを基本とするグリッドを設定した。各グリッドは西から東にアルファベットを、北から南に算用数字を付して呼称した。

調査区のすぐ脇が水路なこともあって水の湧出が著しく、排水ポンプを午前5時から回してようやく9時から作業可能となるといった状態で、極めて厳しい条件下での調査となった。このため精査等も必ずしも充分には行いえず、また、A区は調査区の中央を南北に水道管が埋設され、B区は西半分が既に用水路により破壊されているなど、悪条件が重なったが、住居跡1軒、竪穴状遺構1基、小規模な溝跡11条、土壙3基等を確認することができた。ただし、住居跡をはじめとする各遺構の遺存状態は極めて悪かった。出土遺物は平安時代の須恵器・土師質土器などである。

以上のような成果をもって、現地発掘は7月5日に終了した。

### Ⅳ. 遺構と出土遺物

#### ○第1号住居跡（第4図）

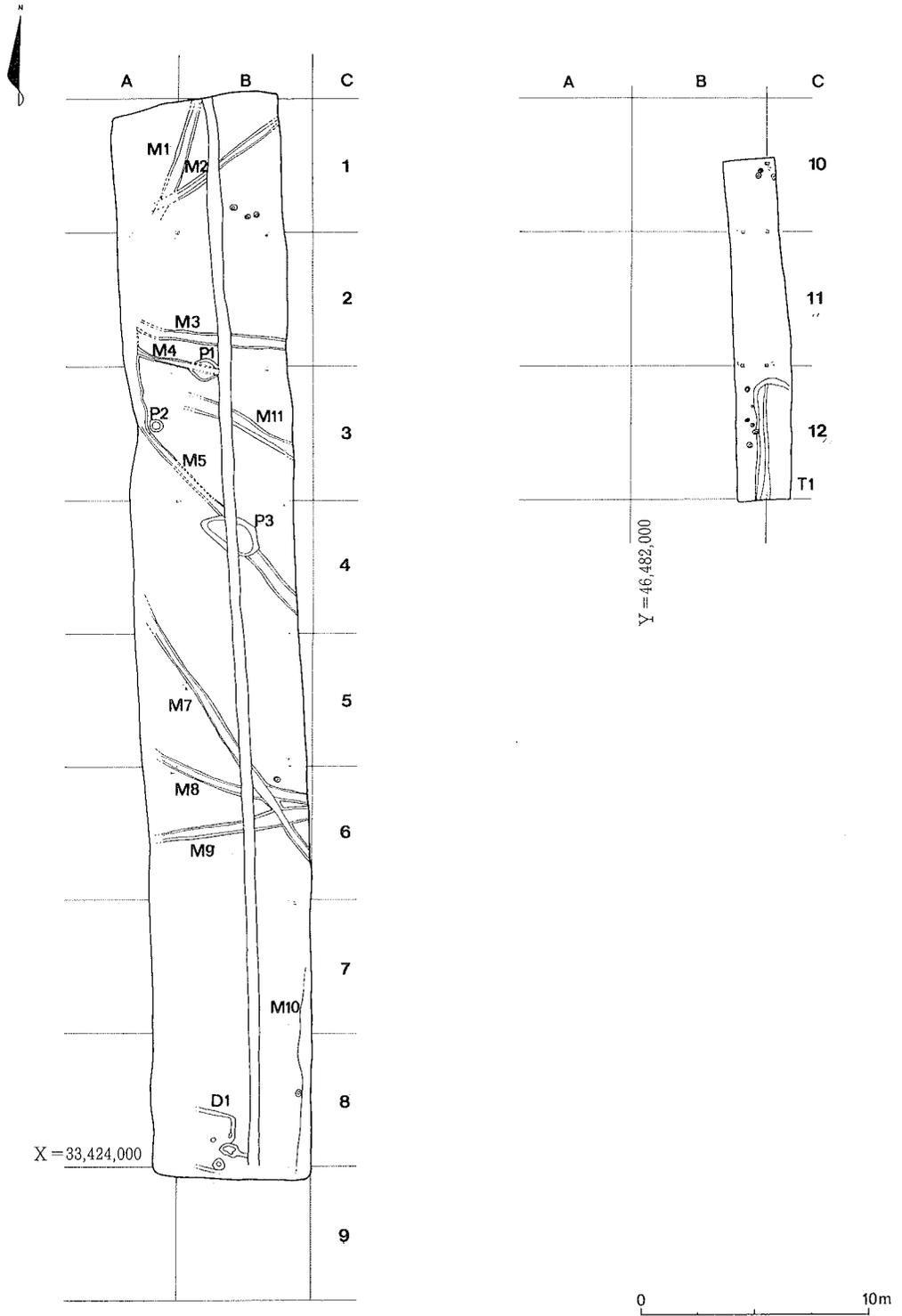
B-8グリッドに位置する。既に大半が削平されカマドの周辺がわずかに確認された。カマドは東辺の中央よりやや南側に構築され、燃焼部は幅約50cm、深さ約20cmほど確認された。カマド煙道先端部は水道管理設溝に破壊されていた。住居跡の主体部は、どうかその存在が確認できるといった状態で、カマドの対面は確認できなかつたため住居跡の長さは不明であるが、幅は約2.8mである。北側には壁溝が確認され、南東コーナー部には径約50cm、深さ約10cmほどの貯蔵穴が検出された。カマド内焚き口部分に径約20cm、深さ約5cmほどのピットが、その西側に同様のピットが検出された。主軸方向はE-15°-Sである。カマド付近より須恵器坏などが出土した。

#### ○第1号住居跡出土遺物（第6図1）

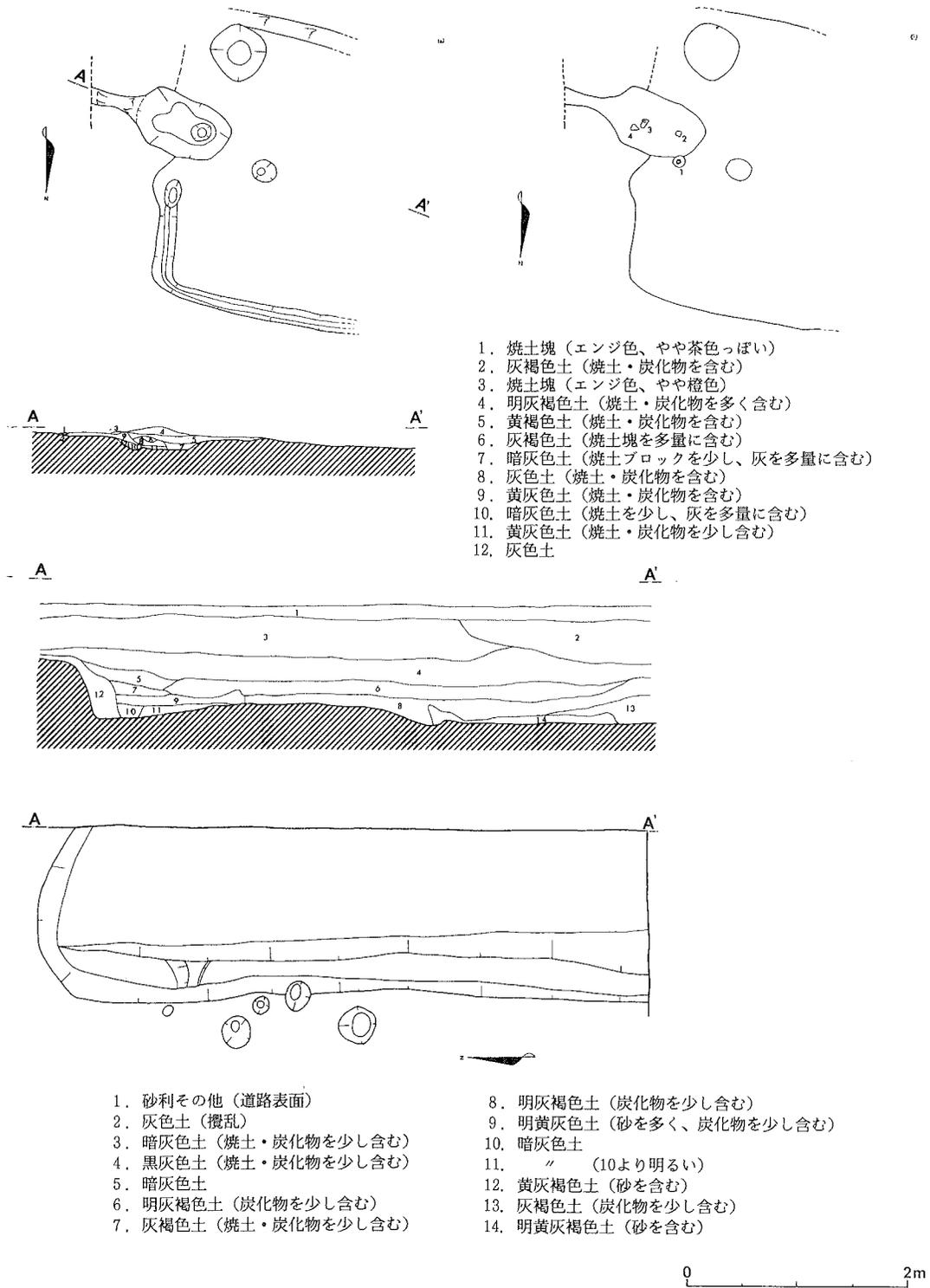
1. 須恵器坏である。口径12.4cm、器高3.5~3.9cm、底径5.3cm。全体に少し歪んでいる。体部内面中位の一部に幅1cmほどの帯状に油煙状炭化物が付着。底面は回転糸切り後主に周囲を少しなでているようである。ロクロは右回転。胎土細、焼成良好、明灰色を呈する。完形。

#### ○第1号竪穴状遺構（第4図）

B, C-13グリッドに位置する。ごく狭い部分しか調査できなかったため、規模・形態等は不明であるが、少なくとも5m以上の長さがあったことが確認できた。深さは現地表面から90~110cm、確



第3図 調査区全測図 (1/300)



第4図 第1号住居跡・第1号竪穴遺構実測図 (1/60)

認面から40～60cmで、底面は湧水のため極めて確認しにくかったが緩い凹凸があった。西辺は確認面から深さ約10cm、幅10～20cmほどのテラス状になっていた。西辺に径15～30cmのピットが4基確認されたがこの遺構に伴うものかは不明。須恵器瓶・坏や土師器の微小破片などが出土したが、埴輪片も1点出土した。

○第1号竪穴状遺構出土遺物（第6図2～4）

2. 須恵器瓶である。推定口径18.0cm。口縁部は外反し、外側面は平坦に成形され、先端は上下にわずかに突出する傾向を示す。頸部は「く」字状に屈曲し、肩部が少し張っている。胎土細、乳白色の小石等を比較的多く含む。焼成緊緻、硬質。青灰色を呈する。破片。
3. 須恵器坏である。推定口径13.0cm。口唇部外反し、器肉は薄い。水挽き痕明瞭。胎土細、焼成良好。灰色を呈する。破片。
4. 埴輪の破片である。流入したものであろう。表面に4本/cmのハケ目。内面は縦のヘラナデ。焼成良好、橙色を呈する。

○第1号土壌（第3図）

B-2・3グリッドに位置する。1.0×1.5mほどの長円形状を呈し西端部は水道管理設溝に破壊されていた。深さは約30cmで第4号溝跡の東端にあり、同溝跡の付属施設と考えられる。

○第2号土壌（第3図）

A-3グリッドに位置する。径約0.5mの円形状を呈し、深さは約20cmであった。

○第3号土壌（第3図）

B-4グリッドに位置する。2.7×1.6mの不整な長円形状を呈し、深さは約50cmであった。第5号溝跡に付属するものと考えられる。中央部が水道管理設溝に破壊されていた。

○第1号溝跡（第3図）

A・B-1グリッドで確認された。幅50～60cm、深さ約10cmであった。

○第2号溝跡（第3図）

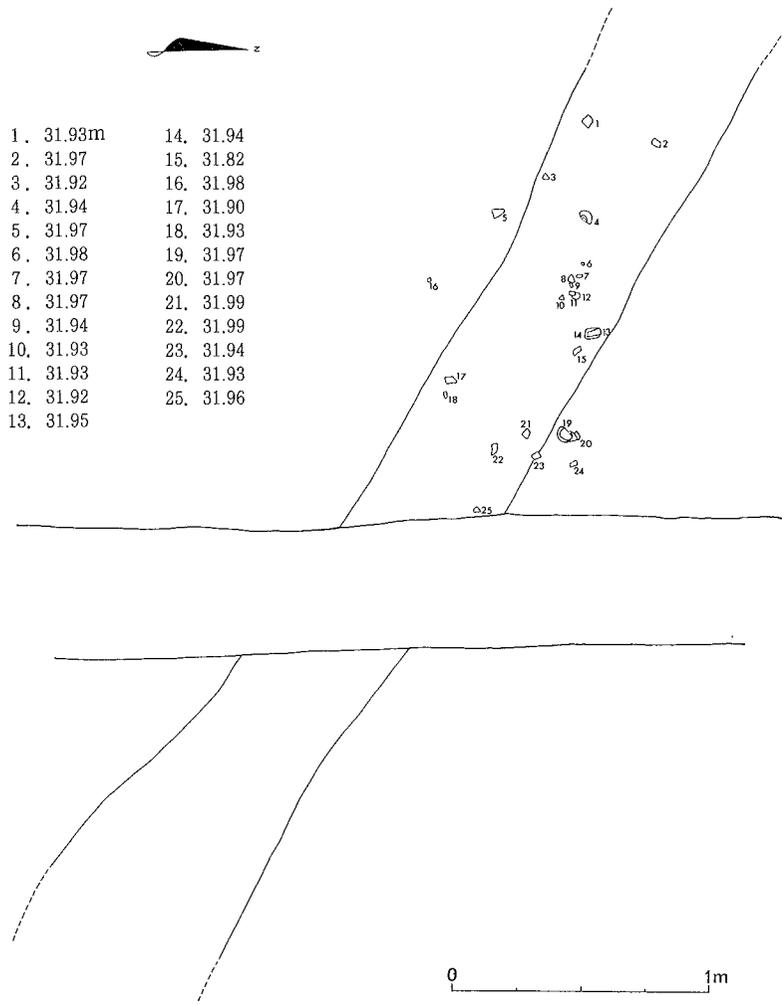
A・B-1グリッドで確認された。幅30～50cm、深さ約10cmであった。

○第3号溝跡（第3図）

A・B-2グリッドで確認された。幅40～70cm、深さ約15cmであった。

○第4号溝跡（第3図）

A・B-2・3グリッドで確認された。幅20～30cm、深さ10～15cmで、東端部に第1号土壌を伴っ



第 5 图 第11号沟迹遗物出土状态 (1/30)

ていた。土壌の東側には確認されなかった。

○第5号溝跡（第3図）

A・B-3・4グリッドで確認された。幅30～70cm、深さ5～20cmで、第3号土壌を伴い、西端は少し北へ迂回していた。幅・深さ共に第3号土壌の東側の方が広く深い傾向が認められた。

○第7号溝跡（第3図）

A・B-5・6グリッドで確認された。幅30～60cm、深さ10～20cmで、第8号・第9号溝跡を切っていた。

○第8号溝跡（第3図）

A・B-6グリッドで確認された。幅40～50cm、深さ5～15cmで、第7号溝跡に切られていた。

○第9号溝跡（第3図）

A・B-6グリッドで確認された。幅50～80cm、深さ約10cmで、第7号溝跡に切られていた。

○第10号溝跡（第3図）

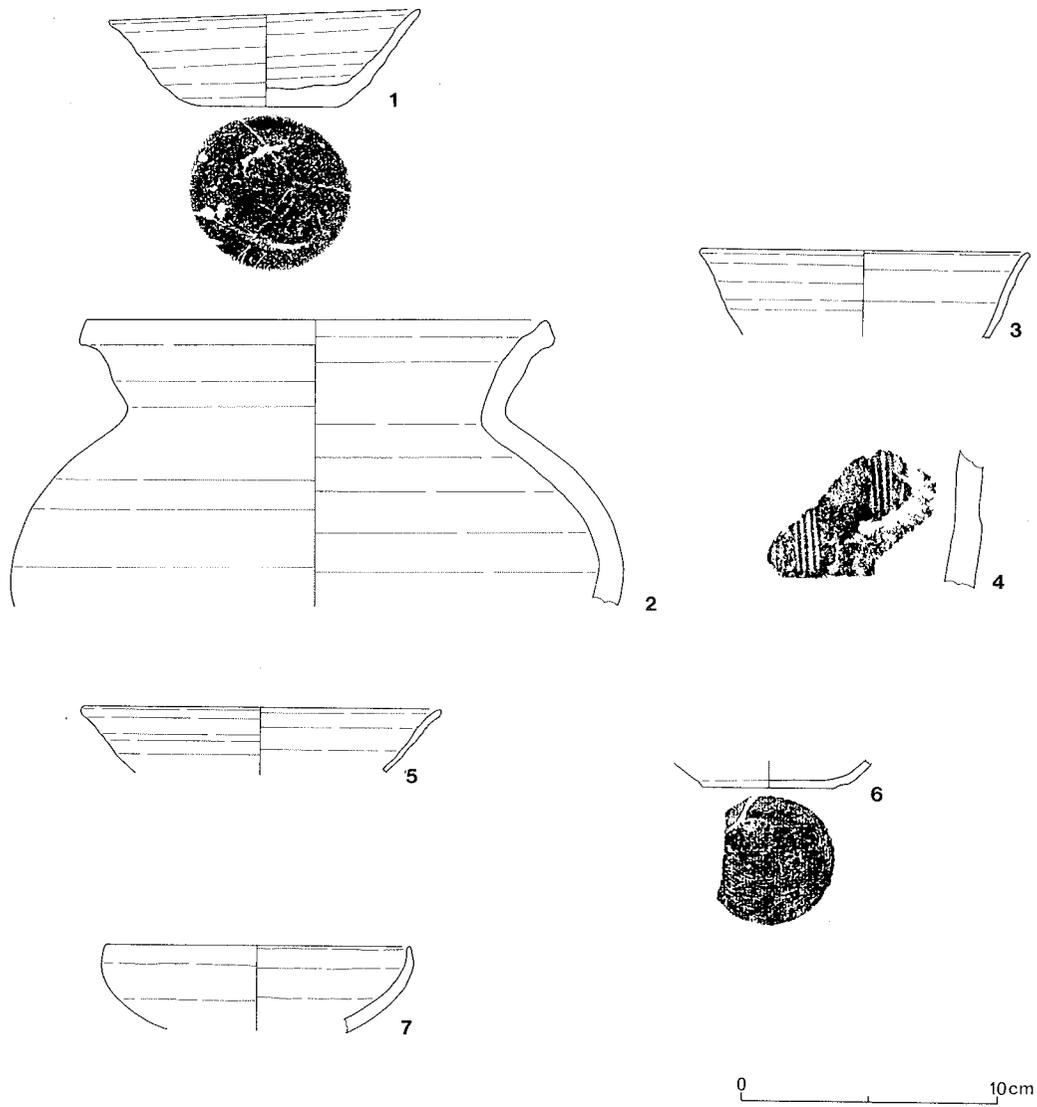
A区の南東隅、A・B-7・8グリッドで確認されたもので、規模等は不明である。調査区の東辺外側を現在南北に流れる農業用水路の古い姿と考えられる。

○第11号溝跡（第3図）

A・B-3グリッドで確認された。幅50～70cm、深さ約10～20cmで、覆土の質が他の溝跡とは違っていたため当初わかりにくかったが、遺物が出土したため確認できたものである。須恵器・土師器の小破片が出土した。

○第11号溝跡出土遺物（第6図5～7）

5. 須恵器坏である。推定口径14.0cm。口縁部外反し、器肉は極めて薄い。口唇部少し肥厚。焼成良。明灰白色を呈するが、器面全体に酸化鉄附着。破片。
6. 須恵器坏である。底径5.2cm。底面は回転糸切り。5と同一遺物の可能性あり。器肉極めて薄い。焼成良。明灰白色を呈し、器面、特に内面に酸化鉄附着。破片。
7. 土師器坏である。推定口径12.0cm。体部外面ヘラ削り。焼成良、淡褐色を呈する。



第6図 出土遺物（1／3）

写 真 图 版



1. 調査区全景（北より）



2. 調査区全景（南より）



3. 第1号住居跡



4. 第1号住居跡遺物出土状態

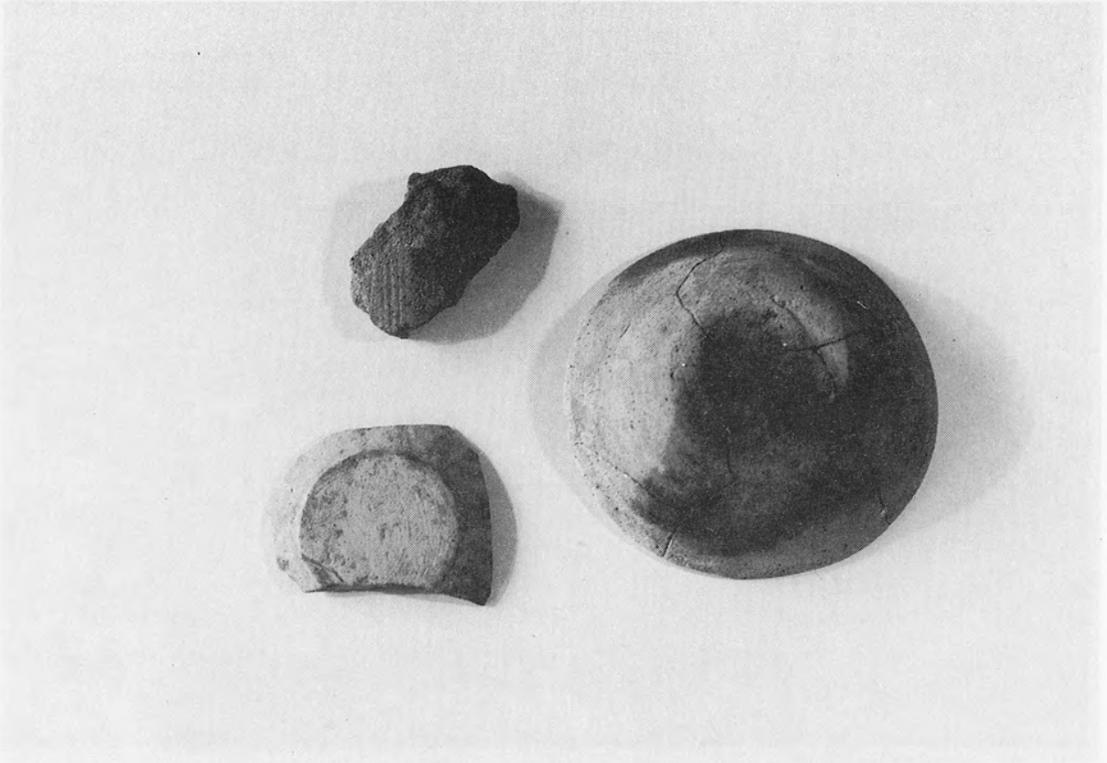


5. 第11号沟迹遗物出土状态



6. 第1号竖穴遗构

图版 4



7. 出土遺物

---

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第30集

明戸東遺跡(第2次)

印刷 平成3年3月20日

発行 平成3年3月30日

発行 深谷市教育委員会

印刷 鈴木印刷株式会社

---

---

「明戸東遺跡（第2次）」 正誤表

訂正箇所	誤	正
第4図表題	第1号竖穴遺構	第1号竖穴状遺構